

おべんとう

きよみずミチル

締め切り過ぎの原稿を、やっとの思いで書き終えると、朝の6時半を過ぎていた。

長時間、パソコンに向かっていた徹夜明けの脳味噌は、脳内ホルモンが大量生産。ランナーズハイならぬ、ライターズハイになり、ピカピカに興奮している。

わたしは、覚醒した頭を鎮めようと、ペットボトルに残ったトマトジュースを、一気にグラスにあけた。

トマトには、体内の血液の流れをサラサラにする効用があるらしいと知ってから、毎朝、毎晩のトマトジュースは欠かせない一品である。

不摂生の極みといった生活習慣の悪循環にはまりこんだ私にとって、トマジュースは体内の浄化をはかってくれる、ありがたい飲み物なのだ。

たっぷりと縁までジュースが入ったグラスをデスクにおいたとき、事件が起きた。

デスクの端に、うずたかく積み上げた資料の山

が、バサリと音を立てて崩れ落ち、あっという間にグラスを直撃したのである。

デスクいっぱいにはサーッと広がる真っ赤なジュース。

わたしは、とっさに持ち上げたノートパソコンを手に、散乱した書類をべっとりと濡らしたあげくに、ポタポタと床にしたたる液体と、空になったペットボトルをなす術もなく見つめた。

常日頃の自分の整理整頓の悪さをたなにあげ、さしたる作品も書かずに、本と資料でいっぱいになったウサギ小屋からの脱出を夢見では、夢追い人を続けている自分の愚かしさを戒められたような気分で、胸がいっぱいになる。

ぬれた書類を、ティッシュで拭きながら、どうしても、のみ損なったトマトジュースへの思いをたちきることができない。

子供のころから、いちど思いこんだら、あきらめることができない往生際の悪さ。こういうときは、始末が悪い。

わたしは、花粉症用のマスクにニットキャップ、

メガネで完全武装をすると、近所のコンビニまで、自転車を走らせた。

早朝のコンビニは、近くにある私立高校の女子学生たちのにぎやかな話し声のせいか、どことなく華やいだ気配でいっぱいだ。

登校前に弁当を買うのだろう。弁当や総菜のコーナーの前で、あれこれ吟味している彼女たちの姿を横目にみながら、レジで精算を済ませたときだ。

わたしの後ろで順番を待っていた女子学生が、カウンターに牛井弁当を置くのが、視界をかすめた。

ふいに、わたしの中に、或る光景が蘇った。

トマトジュースを手に入れた安堵感が、切なさにかわっていく。

こどものころのささやかな事件・・・。

それは、心の奥の間にギュウと封じ込め、見ないふりをきめこんできた光景だった。

食べ物の恨みは恐ろしいという。たとえ、恨みまでいかなくとも、食をめぐる様々な出来事は、

生涯、忘れえぬ思いを、かたちづくるものである。

とくに、子供のころの食事にまつわる出来事は、終生、心にまとわりつき、離れがたい記憶となる。

それだけに、子供のころの日々の食事体験は、健康な心を育てるうえでも、重要な要素のひとつではないかと、わたしは、密かに思っている。

食の光景は、そのまま家族の光景へと繋がるからだ・・・。

スマートフォンや携帯電話。パソコンも、ファミコンも存在しなかったあの頃。

わたしは、男の子たちと一緒に缶けり遊びに飽きると、隣町まで自転車をとぼして走りまわった。

わたしたちは、大好きな鉄腕アトムの世界に、未来を夢見る子供だった。

進歩と発展をめざして突っ走る社会の行方がどうなるのか。

混迷の未来は、わたしたちの夢に隠れ、遠い彼方にあった。あの頃、そこに待っている現実を、想像することはできなかった・・・。

忘れえぬ体験は、小学校4年の秋の日のことだ。

当時、わたしの通っていた公立小学校では、4年生の秋になると社会科見学と称して東京都内のあちこちを、バスで巡った。

国会議事堂、NHKテレビ、交通博物館。社会科見学は、春の遠足に続く、一大イベントだった。

わたしは食がとても細く、痩せてちっぽけな子供だった。

ちっぽけな胃袋を持つわたしにとって、遠足の弁当は、母のつくった大好きな海苔巻きが少量と、お菓子は、都昆布があれば充分だった。食べきれないと分かっているにもかかわらず、母はいつも、たくさんのお菓子や果物と、海苔巻きを用意してくれた。

膨らんだリュックサックをしょって出かけるのは、なんだか、とっても贅沢をしているような気分で嬉しかったのを覚えている。

社会科見学が2日後に迫った夜。母が、高熱を出して寝込んだ。

日頃、少々体調が悪い程度では、決して寝込んだりしない我慢強い母にしては珍しかった。

母の熱は少しも下がらぬまま、社会科見学の前日の夜をむかえた。

その日の夕食は、父がつくった。

父の得意料理はすき焼きと寄せ鍋の2種類しかない。冬は寄せ鍋。それ以外の季節はすき焼きと相場がきまっていた。

母は、薬を飲んで、眠っていた。父と妹と3人で食卓を囲みながら、わたしの心は不安でいっぱいだった。

『明日のお弁当は、どうなるのかな・・・』

薄情にも、母の身体より弁当のことばかりが気になり、食が進まない。

ひとつ年下の妹は、そんなわたしにおかまいなく、ぱくぱくとすき焼きの肉を平らげている。

妹は、わたしと違って食の太い子供だった。そのせいか、わたしよりすらりと背も高く、なかなか

か色気のある女に成長した。

沈みきったわたしの心のうちを察したのか、父が、言った。

「明日は、俺が弁当をつくるから心配しないで、今日は早く寝なさい。このすき焼き、明日はもっと味がしみて美味しくなってるぞ」

すき焼きからたちのぼる湯気がゆらりと揺れる。厭な予感に胸のあたりがザワザワするのを感じた。

わたしは恐る恐る父に言った。

「パパは、海苔巻きをつくれるの？」

「海苔巻きは、つukれないよ。このすき焼きを弁当につめてあげるから、それを持っていきなさい」

無頼を自認し、死ぬまでその生き方を通し続けたわたしの父は、とても子煩悩な側面も併せ持つ男だった。

ただし、いささか、父の自己満足をともなう強引さも兼ね備えた側面だったので、わたしの望みとは、かなりのすれ違いを見せることが、少なからずあった。

そのことが、思春期以後、頻繁にくりかえす父

との激しい攻防戦へとつながっていくのだが、ともかくその時のわたしは、まだ父に対して大人しかった。

父は、上機嫌でビールをのみながら、繰り返した。

「きっと、明日は、もっとおいしくなるぞ」

*

朝になった。

薄曇りのどんよりとした天気が、わたしの憂鬱な気分を拍車をかける。

母の熱は、下がり始めていたが、まだ、起きあがって家事ができるほどまでには、回復していなかった。

台所から流れ出る甘い醤油の臭いが、朝の胃袋に重い。

父が、白い手ぬぐいで頭を覆い、グツグツと煮え立つすき焼き鍋の前に立っていた。

「さあ、できたぞ」

父の元気な声とともに、見慣れないアルミの弁当箱が茶の間のテーブルの上に、どんとおかれた。

それは、ドカベンという言葉がふさわしいアルミの弁当箱だった。

わたしは、その日まで、こんなにも大きな弁当箱が我が家に存在することを知らなかった。いつも使っている小判型で、蓋に花柄がついた小さな弁当箱は、どこにいったのだと思ったが、それを父に言うことは、できなかった。

弁当箱いっぱい、ぎゅうぎゅうに詰め込んだご飯の上に、これまたびっしりと敷き詰めた、すき焼きの残り。

焦げ茶色した牛肉に彩られた弁当の表面から匂いたつ、醤油の香りにむせかけて、わたしの心はさらに重さを増した。

得意そうな顔で父が言った。

「美味そうだろう。昼にはご飯に味がしみて、もっと美味くなる」

自分の好意を踏みにじられたと感じるや、たちまち激昂する父の性格を目撃してきた身としては、

詰め替えてくれとは、とても言えない。

わたしは、朝っぱらから、父の怒りをワザワザかうようなことは、したくなかった。

わたしの眼前には、色とりどりの色彩が真っ白なご飯の中心を飾る母の巻きずしの切り口が、ちらちらとするばかりだった。

「どかべん」に蓋をした父は、彼がいつも使っている大きな白いハンカチで弁当箱を包んだ。

そして、さらに新聞紙で、2重に弁当箱を包むと、言った。

「こうしておけば、汁がでてでも、安心だ」

父は、大仕事をやり遂げたような顔で、わたしに笑顔を向けた。

*

観光バスが走り出すと、雨粒が、車窓をつたいはじめた。

楽しみにしていたその日のイベントは、終日、雨模様になった。

今では、わけもなくバスに乗り、都内の風景を眺めて回るのが好きなわたしだが、そのころは、すぐに乗り物酔いのはてに、ビニール袋のお世話になる子供だった。

国会議事堂を見学、バスに乗り込み、NHKに向かうころ、わたしの乗り物酔いは、臨海点に達しようとしていた。

NHKの正面入り口に到着。クラスメートたちと一列に並んだ時だった。気分の悪さが、臨海点を超えた。胃の奥からこみあげてくる強い不快感。止める術はなかった。

わたしは、その場に立ちつくし、嘔吐した。

見知らぬ男性が、大声で「だいじょうぶかい」と、いいながらわたしの側に駆け寄ってきた。そして、嘔吐するわたしの背中をさすりはじめた。

わたしは、自分が大変なことをしでかしてしまったという思いと、激しい嘔吐の中で、言葉を失っていた。

友人たちが周囲をとりまき、大騒ぎになった時、列の後方から、担任の男性教師が、わたしのもと

に走ってきた。

「ほら、これで顔を拭いて、列にもどきなさい」

担任教師がわたしの顔におしぼりタオルをそっとあてた。

ひんやりとした感触に、ほんの少しだけ気分が楽になった。気付くと、背中をさすってくれた男性の姿はなかった。

『さっきの人は、テレビ局のヒトだったのかなあ』

ぼんやりと、そんな考えが頭をよぎった。

そして、わたしの吐いたものは、誰が掃除をするのだろうと、心配で一杯になった。

あこがれのテレビ局の正面玄関の直前で嘔吐したことの決まり悪さと恥ずかしさ。わたしは、募るみじめさに、身体が重くなった。

NHK見学を終えると、再びバスに乗り込み、今度は、神田にある交通博物館へとむかった。

ちょうど、お昼になろうとしていた。

わたしの乗り物酔いは、どうやら収まったものの、食欲は全くなかった。

交通博物館の食堂が、わたしたちの昼食の場所になった。

サンドイッチや巻きずし。海苔でぐるりと巻いた三角のおにぎり。友人たちの手にする色とりどりのお弁当の中身が、わたしの視界を、いったりきたり楽しそうだった。

わたしは、自分の「どかべん」のことを思った。可愛げのない新聞紙の包み紙。ぎっしりとつまった牛肉。周囲のどこにも、わたしのように新聞紙で包んだ「どかべん」を広げる子供は見あたらない。

隣に座った友人が、赤いギンガムチェックに包まれた弁当を開いた。三角サンドを彩る卵の黄色が綺麗だった。

わたしは、リュックから出しかけていた弁当を、そっと、元にもどした。

「お弁当、食べないの？」

不思議そうな顔で聞く友人たち。

ふいに、涙があふれそうになった。必死で涙をこらえると、喉の奥が、ぐっと押されたように痛

んだ。

「まだ、気持ち悪いんだよね。食べると、また気持ち悪くなりそうだから、食べたくないの」

喉元の痛みをこらえながら、わたしは、友人たちにそう言った。

*

雨は、すでにあがり、どんよりとした曇り空に夕闇が迫ろうとしていた。

バスは予定より遅れて、小学校の校門前に到着した。

学校から自宅までは、わずか10分ほどの道のりだ。

校門前の道を一直線。曲がり角をふたつ曲がれば、我が家の玄関がみえてくる。

単純な道のりである。このままではすぐに家についてしまう。

わたしの心は、しだいに色を増す夕闇の中で、抱えきれないほどの重さを増していた。

リュックの中で重く揺れる「どかべん」の行方が心にのしかかり、歩みがのろのろと進まない。

『どうしよう……。パパは、家にいるだろうか』

仕事は、今日は休みだと言っていたから、いるに決まっている。何しろ、母が病気なのだ。今日も、すき焼きの下準備をしていることだろう。

頭に白手拭を巻き、慣れない手つきで包丁を握る父の姿が眼前をかすめた。

父が、言う言葉は分かっていた。

《おかえり、お弁当は食べたか？》

手つかずの弁当を見たら、父は……。

想像するのも怖かった。

父の笑顔は、たちまちのうちに崩れ、わたしは、耳をつんざくような怒鳴り声の下で、しゃくりあげることになるだろう。

感情の起伏が激しい父は、あふれる優しさと激しさの両面を、極端なまでに抱える男だったから、弁当がもたらす事件の顛末は容易に想像できた。

大好きな父だったが、半面、こどものわたしに

は非常に怖い存在だった。

絶望的な気分の中で、わたしは横道に入った。そして、いつも友人たちと缶けりをする小さな児童公園への道を、あてもなく歩いた。

公園は、我が家とは、正反対の方角にあった。一匹の野良犬が、公園の中をうろついているのが見えた。わたしは、野良犬が怖かった。道のむこうに野良犬を見かけると、遠回りをするようなこどもだったが、なぜかその時は、野良犬を少しも怖いとは思わなかった。

首をうな垂れ、公園の中を彷徨う野良犬は、どことなく腹ぺこに見えた。色あせた茶色の毛並みがどことなくしょぼくれている。

ふいに、ある考えが浮かんだ。

『そうだ！。あの、ワンちゃんに、このお弁当をあげよう』

それは、弁当の中身を捨てるということだった。

だが、犬にあげると思うだけで、救われたような気分がした。

わたしは、公演の入り口に立ったまま、背中の

リュックをおろした。

あたりは、夕暮れが色濃くせまり、もうすぐ陽が落ちるのが、わかった。

暗くなる前に全てを終えるのだ。そう思うと、心なしか、手足が震えた。

自分が、とてつもなく悪いことをするのだという思いに心臓がドキドキする。

『犬にあげるんだから・・・！』

わたしは、自分を叱咤激励すると、公園のトイレ脇の植え込みを目指して、走った。

わたしは、こんもりと茂る植え込みの陰に座り込むと「どかべん」をとりだした。

無我夢中だった。

犬に食べさせると、自分に言い訳をしながらも、弁当を捨てる事実には、かわりはない。

誰かに見られたくないという思いに、全身が痺れるような気がした。

震える手で、ハンカチの結び目をほどき、弁当箱の蓋をあけた。蒸れた醤油の臭いが鼻をつく。

わたしは、弁当から顔をそむけると息を止め、

中身を一気に、植え込みの根元にあけた。

慌てて弁当箱に蓋をし、ハンカチで包み直した時だ。地面に落ちた箸置きが目に留まった。箸箱を拾いあげた瞬間、わたしは、箸を使用していないことに気付いた。

勘のいい父が、まっさらの箸を見逃すはずはない。なぜ、箸が汚れていないかを追求されるだろう。

冷や汗が腋の下をツツーとながれおちていく。わたしは、箸箱の蓋をスライドさせて箸をとりだした。

地面の上に盛り上がった父の牛井弁当。

残骸と化した弁当は、捨てる前よりも量が増えているように見えた。

わたしは、目を瞑り、息を止め、牛井弁当の中心に、箸を突き刺した。

包み直した弁当箱をリュックに入れて植え込みの陰から立ち上がると、一人の中年女性が、植え込み傍のトイレから出てくるのが見えた。

女性は、植え込みの陰からふいにあらわれた小さな小学生に、何かただならぬものを見たような、怪訝な表情をむけた。

わたしはリュックを背負うと、その女性から、逃げるように、公園の出口に向かった。

いつのまにか、野良犬の姿は消えていた。

家をめざして走るわたしの背中では、リュックの中で揺れる空の弁当箱が、からからと音をたてていた。

*

「よし、よし、ぜんぶ食べたんだね。パパのいうとおり醤油がしみて、美味かっただろう？」

ニコニコと上機嫌の父。

「うん」

精一杯の作り笑いで頷きながら、わたしの胸は、張り裂けんばかりだった。

その夜の食事もまた、すき焼きだった。

母の熱は、明くる日からさがり始めた。その後、わたしの遠足の前に、母が寝込むということはなかった。

父と母を騙したという罪悪感は、しばらくわたしを苛んだ。

友人たちに誘われても、わたしは、缶けりに公園を訪れることができなかった。

捨てた牛井弁当がどうなったのか。

弁当の行方を見るのが怖くて、どうしても公園に近づくことができずにいた。

半年余りが過ぎ、弁当を捨てた記憶から生々しさが薄れ始めたころ、わたしは、いつものように公園で、缶蹴りができるようになった。

缶蹴りはできたが、植え込みをのぞくことができぬまま、わたしは成長した。

缶蹴りをした仲間は、散り散りとなり、わたしたちの時は流れた。

その後、今にいたるまで、公園を訪れたことはない。

自分の思いやりへの、好意あふれる対応を望むのは、人間なら誰しもある。

わたしの父は、そうした欲求がとくに強いヒトだった。

今のわたしは、その欲求が父の心にある孤独がもたらした産物であったことを理解できる。だが、あのころのわたしは、あまりにも、こどもだった。

父のいない今、気付いたことがある。

あの日、わたしが捨てたのは、ただの「どかべん」ではなかった。

捨てたのは、牛井弁当いっぱいに託された父の気持ちだったのだ。

わたしは、父が死ぬまで、幻の牛井弁当の事件について、本当のことを告白することができなかった。

父が今、この事件を知ったら、なんというだろう。



■写真

撮影：きよみずミチル

べんとう

<http://p.booklog.jp/book/43648>

著者：きよみずミチル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kiyomizumichiru/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43648>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43648>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.